

# 高大接続改革が高校生に及ぼす影響に関する日中比較研究 —大学選択方略を巡る高校生活の実態を中心に—

○林如玉\*, 倉元直樹\*\*

東北大学教育学研究科\*, 東北大学高度教養教育・学生支援機構\*\*

## 1. 問題と目的

日本では、長年の間、いわゆる偏差値による大学選択を克服しようとして大学入試改革が行われてきた。臨時教育審議会第一次答申(1985)を起点として高校生の大学進学をめぐるキャリア教育が進んできたが、最近でも中央教育審議会の高大接続答申(2014)で類似の議論が繰り返されている。一方、中国でも同答申の3か月ほど前に中国国務院から「入試・生徒募集制度改革の深化に関する実施意見」が公布された。改革のポイントは高考開始以来、初めて「教育・大学入試・生徒募集」を含めた大枠での高大接続改革を実施することにある、とされている(築, 2020)。

両国の大学入試制度は大きく三つの入試区分に分けられる点で類似しているが、各入試区分の募集人員比率には大きな違いがある。日本の令和2年度入試における「一般入試」「推薦入試」「AO入試」(調査当時)の割合は、一般入試が50.9%、推薦入試が38.4%、AO入試が10.6%であった(文部科学省, 2021)。一方、中国の大学入試は、ほとんどが「高考(gaokao, 普通高等学校招生全国统一考試)」を選抜資料とする、日本の一般入試と対応する入試区分である。AO入試に類似した大学の自主募集制度や推薦入試も存在はしているが、一部の大学に募集人員の5%までの自主募集が認められている程度である。また、石井(2020)によれば、中国では1984年度入試から推薦入試が導入されたが、全国で5,000人程度の規模に限定されてきた。すなわち、大半の受験生にとっては高考で高得点を取ることが、事実上志望する大学に入学するための唯一の手段となってい

る。そのため、先述の実施意見(2014)には「多元採用」「科目選択の自由」などが掲げられ、大学入試制度の実質的な多様化が志向されている。

入試制度が多様化すると、受験生にとって大学と入試に関する情報が重要となってくる。多様化が進んだ日本では、進路選択のプロセスの中で得られる大学情報の重要性は、以前から認識されてきた。現在、日本の大学にとっては「入試広報活動は欠かせないもの」(倉元・泉, 2014)であり、受験生が大学情報を得る機会が豊富にある。一方、画一的な入試制度の中国では、大学関連情報を発信する重要性は充分認識されていない。

高校側の体制にも違いが見られる。日本の高校には「進路指導」を担当する校務分掌が存在するが、中国の高校には、それに該当する組織は存在しない。そこから、中国の高校ではキャリア教育が十分に重視されていないことが分かる。

長年の改革を経て、日本では多様な高大接続に向けた環境が整備されてきたが、中国では高大接続に対する意識はない。この環境と認識の差は高校生の大学進学に向けた情報収集活動に影響している。中国と比較して日本の高校生は早期から頻繁に大学選択のための情報収集活動を行っている(林・倉元, 2021)。そこに両国の高校生の大学選択方略の質的な違いが現れている可能性がある。本研究では、両国の進学校で学ぶ高校生の大学選択方略を巡る生活実態を浮き彫りにする。

## 2. 方法

### 2.1 調査方法

本研究は質問紙調査法を用いた。日本調査は、

2019年2～4月に全国11校の高校生7,700名を対象にウェブ調査を行った。中国調査は2019年6～8月に中国河南省における6校の高校生419名を対象に実施した。調査対象や調査手続きの詳細について、林・倉元（2021）を参照。

## 2.2 調査内容

調査票のうち、本報告で分析に用いた項目は、学年、性別、高校生活の中心、入試方式の選択と志望大学の決定時期に関する項目である。そのうち「入試方式の選択」と「志望大学の決定時期」は学年による状況が違うので、高校1、2年生と高校3年生の2群に分けて、それぞれの質問項目を設定した。他の項目は学年共通項目である。具体的な質問内容は以下に説明する。

### (1) 「高校生活の中心」

全学年共通の項目として、高校生活の中で「自分が一番大事だったと思う活動」について尋ねた。この設問への回答を「高校生活の中心」と定義する。選択肢は「①勉強、②部活、③（校外の）自分の興味関心」である。

### (2) 「入試方式の選択」

「どういう方式で大学入試を受験するか」について回答は「一般入試」「推薦入試」「AO入試」「その他」の四つに設定した（本報告で入試区分の表記は日本の用語を使う）。1,2年生対象の設問で「まだ決まっていない」という選択肢を加えた。

### (3) 「志望大学の決定時期」

1,2年生の「志望大学の決定時期」について、志望する大学はまだない可能性があるため、具体的な決定時期を問うのではなく、現在の志望大学の状況を問う設問とした。「今の自分の気持ちに一番合う選択肢を選んでください」という設問について「①絶対進学したいと思う大学がある」「②憧れの大学がある」「③何となく気になる大学がある」「④進学したいと思う大学はまだない」の四つから回答を求めた。

3年生の「志望大学の決定時期」について、決定時期の具体化をするため「第一志望の大学への受験はいつ決めましたか？」という設問に「高校1年目」「高校2年目」「高校3年目」「統一試験が終わった後」の回答を設定した。次に、早期に受験したい大学と最終に受験した大学の一貫性を検証するため「実際に受験した大学は1~2年生の頃に、受験したいと思っていた大学と同じですか」を問うものがあつた。

## 3.結果

データクリーニング後の中国の有効回答者数は192、日本の有効回答者数は1,019であった。性別、学年の度数を表1に示す。

表1 性別と学年の度数表

		国		合計
		中国	日本	
性別	男子	71	440	511
	女子	121	578	699
学年	1年生	48	437	485
	2年生	58	423	481
	3年生	86	159	245

注：無回答は除く

### 3.1 「高校生活の中心」

高校生活の中心に関する分析結果は表2に示す。高校生活の中で一番重要な活動として、「勉強」を選ぶ生徒の割合が両国とも一番高い。「部活」「自分の興味や関心」について、日本では半分以上の生徒がこの二つの活動を選択したが、中国ではその割合は15%にも達しなかった。

表2 「高校生活の中心」の度数表

	中国		日本	
	N	%	N	%
勉強	166	86.5	484	47.5
部活	6	3.1	365	35.8
自分の興味関心	20	10.4	169	16.6

次に、「国」と「高校生活の中心」とのクロス集計表を作成し、カイ2乗検定を行った、「国」

( $\chi^2(2) = 105.927, p < .001$ ) に有意な差が見られた。「国」と「高校生活の中心」に対して残差分析を行った結果、「勉強」を「高校生活の中心」と選んだ中国の高校生の割合は日本より有意に多かった。「部活」「自分の興味関心」を選択した割合について、日本高校生のほうが有意に多かった。最後に、学年ごとに「国」と「高校生活の中心」とのクロス集計表を作成し、カイ2乗検定を行った。全学年において有意な差が見られた(1年生: $\chi^2(2)=23.461, p < .001$ , 2年生: $\chi^2(2)=46.428, p < .001$ , 3年生: $\chi^2(2) = 41.302, p < .001$ )。残差分析の結果、全学年において、中国データの方が「勉強」を「高校生活の中心」を選択した割合が日本より多かった。「部活」は日本データの方が多かった。

### 3.2 「入試方式の選択」

1,2年生を対象とした「入試方式の選択」の回答を表3のクロス集計表に示す。「国」と「入試方式の選択」との連関を検定したところ、有意であった( $\chi^2(4)=31.969, p < .001$ )。残差分析を行った結果、「まだ決まっていない」を選んだ日本の高校生の割合は中国より有意に多かった。3年生を対象とした「入試方式の選択」の回答は表4にまとめ、「国」と「入試方式の選択」との連関を検定したところ、有意であった( $\chi^2(3)=12.120, p < .01$ )。受験した入試方式について、「一般入試」と選んだ中国の3年生の割合は日本より有意に多かった。「推薦入試」を選択した割合について、日本高校生のほうが有意に多かった。

表3 1,2年生「国」と「入試方式の選択」のクロス集計表 (N=961)

		一般入試	推薦入試	AO入試	まだ決まっていない	その他
中国	度数(%)	80(75.5)	3(2.8)	5(4.7)	10(9.4)	8(7.5)
日本	度数(%)	585(68.4)	63(7.4)	54(6.3)	145(17.0)	8(0.9)

表4 3年生「国」と「入試方式の選択」のクロス集計表 (N=199)

		一般入試	推薦入試	AO入試	複合型
中国	度数(%)	34(81.0)	1(2.4)	2(3.4)	5(6.5)
日本	度数(%)	84(53.5)	33(21.0)	14(8.9)	26(24.5)

表5 1,2年生「国」と「志望大学の決定時期」のクロス集計表 (N=964)

		絶対進学したい と思う大学	憧れの大学	何となく気にな る大学	進学したい大 学はまだない
中国	度数(%)	9(8.5)	55(51.9)	29(27.4)	13(12.3)
日本	度数(%)	195(22.7)	294(34.3)	308(35.9)	61(7.1)

表6 3年生「国」と「志望大学の決定時期」のクロス集計表 (N=180)

		高校1年目	高校2年目	高校3年目	統一試験が終わった後
中国	度数(%)	1(2.4)	2(4.8)	6(14.3)	33(78.6)
日本	度数(%)	12(8.7)	45(32.6)	80(58.0)	1(0.7)

### 3.3 「志望大学の決定時期」

1,2年生を対象とした設問への回答を表5で示す。「国」と「志望大学の決定時期」との連関性を見るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意であっ

た( $\chi^2(3)=22.361, p < .001$ )。残差を見ると、日本の1,2年生が「絶対進学したいと思う大学」を選択した割合が中国より多かった。「憧れの大学」を選択した割合は中国の1,2年生が多かった。

3年生を対象とした設問で、「国」と「志望大学の決定時期」の回答を表6で示す。連関を検定したところ、有意であった( $\chi^2(3)=127.510, p<.001$ )。残差分析の結果、「統一試験が終わった後」を選択した高校生の割合は中国の方が多く、「高校2年目」「高校3年目」に関しては日本高校生の方が多かった。「志望大学の一貫性」の解答(N=199)は表7で示す。次に、「国」と「志望大学の一貫性」との連関性を見るためにカイ2乗検定を行ったところ、有意な結果が見られた( $\chi^2(1)=12.184, p<.001$ )。また、残差分析を行った結果、「同じ大学を受験した」を選択した3年生は日本の方が多かったと解釈することができる。

表7 「国」と「志望大学の一貫性」のクロス集計表

		同じ	違う
中国	度数(%)	5(11.9)	37(88.1)
日本	度数(%)	64(40.8)	93(59.2)

#### 4.考察

「高校生活の中心」については、日中両国とも「勉強」を選択する生徒が一番多かった。しかし、その程度には大きな違いが見られた。中国ではほとんど「勉強」が選択されていた一方で、日本においては「部活」「自分の興味関心」を選択した生徒の比率が半数を超えていた。「部活」を「高校生活の中心」と選択した日本の高校生の割合が中国の高校生よりも多かった背景には、部活に割く時間に大きな差があることが挙げられる。このことから、日本の高校生が学校において、決して受験勉強一色の生活を送っているわけではないことが改めて確認された。すなわち、日本の高校生の活動は中国よりも豊富で、勉強以外にも多種多様な活動を行っていることが分かる。

「入試方式の選択」について、「まだ決まっていない」と選択した日本の1,2年生の割合は中国の高校生よりも多かった。一方、中国の1,2年生は将来「推薦入試」や「AO入試」を選択した者は少なく、実際に受験した3年生になるとそれぞ

れ1,2名しかいなかった。日本の入試方式が多様であるのに対し、中国の入試方式は一般入試がほとんどであり、「推薦入試」や「AO入試」の募集人員は厳しく制限されているため、高校生は1,2年生の時から一般入試以外の入試方式を選択する余地がない。一方、日本の場合、多様な入試方式があり、高校生は入試方式に対する選択権を持っている。1,2年生の時はそれを考える時期と位置付けられていると言える。

「志望大学の決定時期」について、1,2年生の段階で「絶対に進学したい大学がある」日本の高校生は中国より多かった。3年生に対する志望大学の具体的な決定時期に関する質問では、日本の高校生は「高校2,3年目」で決定する傾向があるのに対し、中国の高校生の7割以上は「統一試験が終わった後」に志望大学を決定していた。さらに、日本の高校生が1,2年生の時に受験したいと思う大学と実際に受験した大学が同じである割合は中国の高校生より多かった。したがって、中国の高校生は入試の成績によって志望大学を決定しているのに対し、日本の高校生は早い段階で志望する大学を決め、その大学の入試に向かって準備をしていることがうかがえる。

以上の結果から、大学選択方略を巡る高校生活の実態には日中の高校生に間に本質的な違いが見られる。日本の高校生は高校生活で様々な体験をし、大学に関する情報を得て、より早い段階で志望する大学を決めている。日本における長年の高大接続改革政策が高校生の大学選択方略に影響してきたと言えるだろう。中国で始まった高大接続改革政策が高校生の選択行動にどのような影響を及ぼすか、今後の変化について注目したい。

#### 「謝辞」

本研究の日本調査はJSPS 科研費 JP16H02051、中国調査はJSPS 科研費 JP20K20421 の助成に基づく研究成果の一部である。